

一石燈籠の置所は、手水鉢近邊砂雪隠の邊、又は隣上りの邊、あかり用に立所を見合置が本意なり、半月の有方を西へ成様に居申筈と有之候へ共、其路地の場に寄べし、廣き路次には石燈籠二ツも可置、内路次に石燈籠二ツ置不申沙汰も有之候へ共、長路次には二ツも三ツも置申度候、然共石燈籠古キ見事成を路次の景氣に置申事に候へば、少々明りの惡敷所にては景氣に置申候、夜會には燈心長ク入申候、朝會には燈心短ク入申候、夜は客長座のため、朝は夜深より客待申心持にて、燈心長短有之候、石燈籠路次に置候は、利休鳥邊野通りて、石燈籠の火残り、面白靜成體思ひ出て、路次へ置申候よし云傳有之候、又等持院にてあけはなれて、石燈籠の火を見て面白がり、夫より火を遅く消し申由云傳る、石燈籠前に火燈シ石とて、大ぶり成石を居へ、とび石居へ續る也、朝會には、夜あけ候て會席出し候と其儘燈籠火を消申候、

〔南龍公言行錄^中〕小堀遠州作の石燈籠の事

御隱居可被成五六年前ニ、酒井讚岐守入道空印、此方御城附ニ向て、大納言殿ニ者、小堀遠州作之石燈籠御所持と承候、拜見仕度と所望也、頼宣君御機嫌ニ而、庭之模様を作り替候へとて、公儀之御庭作山本道勻鎌田庭雲を御呼、御庭之作直有、御庭出來、石燈籠を立る日、千宗左病氣ニ而不出、千賀道味も指合有て不出、道勻庭雲彼石燈籠をみて、小袋の日形月形の窓狭ク、當世ニ合不申候、ひろげ候は、可然と有、承りの役人、蔭山宇右衛門石工を數人呼寄、火袋の窓を道勻庭雲指圖の通りニ鑿り廣げて、石燈籠を立て歸る、其晚石燈籠立候段、宇右衛門申上候付、頼宣君御出御覽被_レ成ニ、火袋の窓をほりひろげ候を御覽付、大きニ御驚、是は何たる事を致候と御尋、蔭山承、道勻庭雲指圖にて候と申上ル、そにて大ニ御氣色替り、奉行ハ何の役ぞ、彼等が申とて、何とて此方へ不伺、大事之古石燈籠疵付候へば、最早用ニ立ぬ捨り物也、さて、惜き事かな、遠州の指圖の窓を道勻庭雲ほりひろげ候事、不届不調法申も愚也、空印へ約束はしたり、何とかすべきと御叱、宇